

# スウェーデン認知症ケアの第一人者による来日講演 認知症という病気の特徴と補助器具によるケア

スウェーデンの認知症ケアに関する第一人者、インゲ・ダーレンボルグ氏による講演会が、三月二十三日、東京の大田区消費生活センターで開催されました。インゲ・ダーレンボルグ氏が認知症という病気の特徴を解説するとともに、実際にスウェーデンで実践されている補助器具による認知症患者の支援などについて紹介されました。その模様をレポートします。



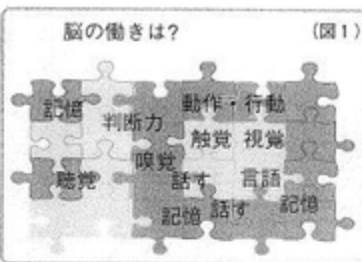
挨拶をされる主催者の三島浩司・代表取締役。

会場には、ホームヘルパー、ケアマネジャー、看護員、保健師、有料老人ホーム等施設の施設長など、六十名が詰めかけて、満席状態でした。地元のケアリハビリ「大田 ケアリハビリ」の取材員も入り、翌日、「デイリー大田」という情報番組の中で紹介されました。

講演会では、株式会社フジヤマが代表取締役の三島浩司氏が挨拶がありました。続いて、コリアインターネットを主とした株式会社タムラプランニングの代表取締役、田村明孝氏より、講師のインゲ・ダーレンボルグ氏と通訳のトモコ・ハンセン氏の紹介がありました。

会場には、ホームヘルパー、ケアマネジャー、看護員、保健師、有料老人ホーム等施設の施設長など、六十名が詰めかけて、満席状態でした。地元のケアリハビリ「大田 ケアリハビリ」の取材員も入り、翌日、「デイリー大田」という情報番組の中で紹介されました。

スウェーデンの認知症ケアの第一人者、インゲ・ダーレンボルグ氏による講演会が、三月二十三日、東京の大田区消費生活センターで開催されました。インゲ・ダーレンボルグ氏が認知症という病気の特徴を解説するとともに、実際にスウェーデンで実践されている補助器具による認知症患者の支援などについて紹介されました。その模様をレポートします。



インゲ・ダーレンボルグ Inge Dahlerborg

1949年、デンマーク生まれ。スウェーデン政府の福祉部長や同市シュエーワード地区の福祉プロジェクトリーダーを経て、高齢者・障害者ケアコンサルタントとして独立。認知症患者への介護・支援分野での活動とケアの発展に関するコンサルティングや講演行を行っている。スウェーデン認知症協会の会長やヘルベリ市認知症ケアセンターの副理事長も務めており、認知症高齢者のケアメカニズムの解説や約60本の書籍の著者など、その医療方法には定評がある。その一方で、認知症高齢者の補助器具の開発プロジェクトに参加し、認知症高齢者に最適な補助器具の開発活動を行なっている。さらには、大学や専門学校での講師として看護・介護職員の育成も行なっている。2006年より、スウェーデン認知症ケア国家プラン作成委員会の委員、作業療法士、

そして、インゲ氏が紹介されたのが、アルツハイマー病になった人の記録映像です。その中に登場するアルツハイマー病の高齢者は、「自分ではまだいらないな」と言っているにもかかわらず、でも何かを邪魔をして、うまくできない」と赤十字に叱責されていました。

「できる」と思っていて、できないというのには、どんな気持ちでしょうか」とインゲ氏は問いかけられます。そして、その残された能力をうまく引き出すのが私たちの役割だとも、おっしゃっていました。

「自分でできると思っているのに、うまくできない」ということになるのです。例えば「お母さんの所へ帰る代わりに」と言つて家を出ようとする認知症患者がいますが、それが昔の事はよく覚えていてからです。つまり、長期記憶は残るやうなのです。一方、同じ事を何度も繰り返すから短期記憶の機能がなくなっているから、このパズルの壊れて無くなってしまったピースを治したり、再び埋めたりすることはできません。段々無くなったピースはなくなり、

認知症という病気の捉え方  
人間の脳はいっぱい、どのよじろ活動しているのか、その間に、インゲ氏は国1のスクリーンを示されました。ジグソーパズルです。「脳はパズルのようなんだ」というのです。パズルのそれぞれピース同士は協力し合いながら、機能を果たしています。脳の機能を果たすには、パズルのピースが全部ないとはいけません。一つだけ、なくなってしまうと、「自分でできると思っているのに、うまくできない」ということになるのです。

それでは、どうするか、インゲ氏は「周りの人間が変わっていくか、受け入れなければならない。パズルの壊れている所を引出すようにして使っていく」とおっしゃっていました。

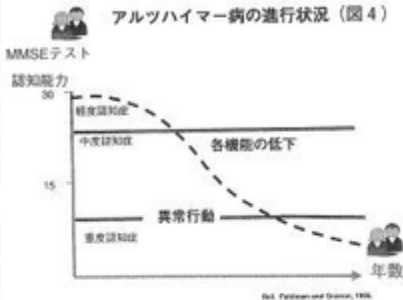


参加者の間を歩き回り、ときに話しかけられて、熱評をふるわれるインゲ・ダーレンボルク氏。



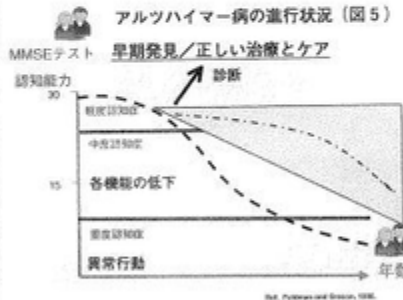
写真やビデオを駆使して解説された講演のようす。

### アルツハイマー病の進行状況 (図4)



Ref. Folstein and Grant, 1986

### アルツハイマー病の進行状況 (図5)



Ref. Folstein and Grant, 1986

る器具、電話を入れたおけば自動的  
に変わるカレンダーなどを。  
薬の服用を忘れる人や服用したか  
どうかを忘れる人のためには、薬を  
入れてセットしておく、服用時間  
にビジーという音とライトで知ら  
せ、必要な薬が出てくる器具が  
ありました。

また、巻子を押しして電報をかける  
ことも認知症の方には難しい行為の

一つですが、そんな方のために、顔  
写真の付いたボタンを押せば、その  
人のところへ電話をかけるられる電話  
機が実用化されています。巻子のボ  
タンもありますが、認知症の方が誤  
らないように、巻子の部分を隠さ  
るようになっていきます。

出かけるときに玄関のドアに鍵を  
かけたかどうかを忘れる人のための  
補助器具もあります。鍵にキーホル

ダーのように付けておき、鍵のマー  
クが表示されていれば鍵をかけたこ  
とがわかるというものです。  
時計を見ても何時間なのか理解でき  
なくなったりした人には、ボタンを押すと、  
音で日時を告げられる補助器具  
がスウェーデンでは使われています。  
そうした電子機能だけでなく、ホ  
ワイトボードなども補助器具として  
有効に活用できるというインゲ氏は紹介

されました。ホワイトボードにスケ  
ジュールを書いておけば、認知症の  
方が何時頃、何が起こるかわかり  
ます。タンスに服の種類を掛けた名  
札を貼ったり、食器棚に器の形のイ  
ラストや器の写真などを名札を貼っ  
たりしておくことも有効です。

その人が何が好きなといったこと  
を記入した記録帳も、他の施設や介  
護者に情報を伝えることができる一  
つの補助器具です。  
介護者の服装も補助器具と言える  
かもしれません。というのも、お年  
寄りに着が支障のないかわかりま  
せん。仕事に纏った服装や名札を身  
に付けることはもちろんですが、例  
えば支障者はホワイティングするな  
ど、統一すれば、上の方からやすく  
なります。そして、誰もが同じ手順  
でケアを受けることも大事だと、イン  
ゲ氏は強調されています。

もちろん、ここで紹介された補助  
器具は、その人を支えるチームの中  
で検討され、決定していきます。ま  
ずから、認知症の具合によって、

#### 早い時期にアルツハイマー病を発病する

若年性認知症 (65歳以下) (図2)

忍び寄るように発病する

初期の症状:

- ・記憶力の低下
- ・失行/行動障害
- ・問題解決能力-実行能力の低下
- ・ストレスに弱い

#### 65歳以上で発病するアルツハイマー病

忍び寄るように発病する (図3)

記憶力の低下が目立つ

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 記憶障害         | 時間への理解        |
| 自覚           | 行動力           |
| ストレスに敏感      | 見当障害          |
| 診断性          | 人格変化          |
| 集中力          | 失禁症           |
| 学習・想起力       | 操作、誤り方(道具など)  |
| 物に対する認識力     | 物理的に物事を考えられない |
| 理由・結果が理解できない |               |

ンガーをかける人だったのか、それ  
とも以前からハンカチにかけず、服  
を乾かすばなしにする人だったのか  
を知らず、つまり、生活歴を知る  
ことが重要になってきます。認知症  
に関わる人は、一人ひとりの生活歴  
を理解することが必要不可欠だと、  
インゲ氏は強調されています。  
認知症を捉えられる現状

認知症の方はストレスに非常に弱い  
と強調されています。  
六十五歳以上の認知症の方の場合  
は、記憶力の低下がいまざらざら  
そうです。ここで紹介された記録帳  
機では、裏に「水を持ってきて」と  
言われた認知症の方が、最初、コッ  
プとナイフを持ってきました。再び、  
戻されたのは花瓶に水を入れて持っ  
てきます。その際、誤用を間違えた  
り、水を出しっぱなしにしたりして  
います。  
こうした認知症がどうかを測る

ために、スウェーデンではMMSE  
テストというものを実施しているそ  
うです。そのテストによって、認知  
症の程度を「軽度」「中程度」「重症」  
の三つに分けて考えています。十年  
から十五年かけて、徐々に脳の機能  
を失っていく、症状が重くなってい  
きます(次ページ・図4)。  
認知症が進行していくスピードをゆ  
るやかにするため、スウェーデンで  
は早期診断を実施しています。早く  
診断することで、薬の効果が現れや  
すいからです(次ページ・図5)。  
とはいえ、認知症を捉える薬は  
まだありません。あくまでも症状を  
和らげる薬です。スウェーデンでは  
現在、四種類が使用されているそう  
です。

認知症患者や家族のための補助器具  
認知症の方には、薬の服用と同時に、  
補助器具を使うことになりませ  
ん。そこで、インゲ氏は様々な補助器具  
を示され、紹介していた。分らない  
薬をどこに置いておく、分らない  
なる人のために、ボタンを押すと、  
ビジーという音を出して所在を知らせ

## 重度の認知症患者とのコミュニケーション



実際にスウェーデンで使用されている補助器具の数々。



重度の人にも補助器具として使われている人形を飾るイング氏と講師のトモコ・ハンセン氏。

補助器具も変わってきます。特に「重度の人の場合、補助器具や我々の支援はまったく違うものになる」と、イング氏は述べられました。

「バズルのピースがほとんどない人の場合は、アクティブかどうかではなく、いかにその人が質の高いQOL（生活の質）を送っていたかというのを考える」というのです。

したがって、周辺環境が非常に重要になります。そこで、「私たちはこれを重度の人の補助器具と呼んでいる」と言って、イング氏が示されたのが図6です。

バズルが振っていないと強いものです。ところが、「重度の人でも、自然や動物をこちらに對して要求が厳しくないのです。換えることが楽で、リラックスできる」そうです。

スウェーデンでは、こうした犬や猫、人形などを認知症ケアの補助器具として、たくさん使っているようです。実際、「目が合いやすく作られている、この人形を使うと、コミュニケーションをとりやすい」とのこと。しかも女性だけでなく、男性にも効果が出てるといいます。

次に、スライドや記録映像、補助器具などを示されて、認知症について語られた講演会は、アツという間に予定時間が過ぎ、質疑応答に移っていききました。

参加者の方々は、認知症の方と向き合っておられる実務者の方々がほとんどなので、日頃の疑問や悩みなどを熱心に質問されます。その一つひとつにイング氏は丁寧に答えていかれました。

和やかな雰囲気なのか、二時間にならないうちに終わった講演会のアンケ

ートには、「もっと時間が欲しかった」「もっと詳しく話を聞きたかった」「また聞きたい」という参加者からの声がありました。

そんな講演会の報告は、イング氏からのメッセージをお伝えして、終わることになりました。

「認知症という病気は、場合によっては脱すかしないものかと思ったり、隠してしまったりします。ですから、表面に出てこないものがたくさんあります。しかし、私たちは家族に認知症がいるから脱すかしないか、隠すとかしないで、認知症の人をもっともつと持ち上げるように注目しましょう。皆さん、認知症の人に接した場合には、次のことを必ず覚えておいてください。認知症は脳のいちばん重要なところを侵されてしまった病気であるということです。これから家に帰って、職場とか家庭とかで認知症のケアをなさる方が多いと思います。でも、忘れないでください。私たちは認知症の方が安心できるように、いい毎日を送れるように、一緒に力を合わせて頑張らしましょう」